幕末の京都戯作者・山東京鶴：その著作活動と小伝

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 了 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5861

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻国文　第45号　二〇一四年三月

幕末の京都戯作者・山東京鶴

――その著作活動と小伝――

石川　了

一、はじめに

江戸が上方をリードした幕末期において、それなりの戯作者が登場・活躍した大坂（例えば好花堂野亭・浜松歌国・暁鐘成・南里亭其楽・柳園種春・松川半山等）と異なり、顕著な戯作者が登場しなかった京都でいくらかなりとも注目すべき人物をあげるとするならばその中の一人に、従来取り立てて調査研究されることがなかった山東京鶴がいる。本稿では進出資料を含む京鶴の著作活動を概観するとともに、その小伝をまとめ直してみたい。

二、『京摂戯作者考』における京鶴略伝

江戸後期の京都戯作者について調べるのであれば、まずは幕末期の讃岐高松藩の江戸家老で蔵書家にして曲亭馬琴と親交があった木村黙老の『京摂戯作者考』[1]を検索するのが順当であろう。当たってみるに、作者七十余名と浮世絵師三十七

名、計百余名の上方人があげられているが、このうち京都の人物としては作者として、畠中銅脈（狂詩）・池田東籬亭（名所図会）・森川保之（絵）・京鶴・鶴山逸人（京鶴とは別人扱い）等九人と、浮世絵師として「菱川清春」等四人の計十三名を掲出するのみである。

さて、そこに記されたの京鶴についての記述は、

京師の人、文政の頃、戯作の書を出す。名は貞卿、字は和忠、山月主人と号す。山川氏、俗称美濃屋文蔵、初暁鐘成門人と成、澄成と号す。当時西の京に住す。

とある。また後述するように、山東京鶴の別号である鶴山逸人にいては、ただ

京師の人、瀬川氏、名は恒成。

とだけ記されている。京鶴の記載とは氏と名が異なるから根拠は不明ながら、黙老が両者別人と認識していたことは明らかであるが、同一人物であることは後出の諸資料から明白であろう。なお、京鶴戯作の挿絵を担当することしばしばだった菱川清春について黙老は、その「浮世絵師」の部に「青陽齋菱川清春」の略伝として、

京師の人、医師村何某の男、幼名国次郎、後、国助と改む。初、上田公長門人、今時、紀州若山に移住す。更めて小野広隆と号す。

と紹介している。また井上和雄氏『浮世絵師伝』（昭和六年、渡辺版画刊）によれば菱川清春青陽は、

俗称吉左衛門、蕙泉齋、雪艇と号し、後に小野度隆（ママ）と改名、師宣以後菱川の五代目を名乗る者か。

といい、天保初年には大坂上町に住したという。

三、著作活動

京鶴略伝の輪郭が多少なりとも具体的になってきたところで、さらに詳細に検討するためにも、ここでその著作活動について、滑稽本・洒落本・読本の順でこの三分野別の諸作に①～⑩の通し番号を付して、新出資料を交えつつ述べることにする。

まずは滑稽本である。

①四国栗毛（角書「御室／八十八ヶ所」）中本

前篇上之巻（上下）二冊　本学、尾崎久弥

前篇下之巻（上下）二冊　本学

後篇（上下）　二冊　版木所見・版本未見

版木：片面一丁彫りの両面彫り

前篇上之巻　本学十九枚（三枚計六丁分欠）

前篇下之巻　本学二十五枚（「序ノ三」までと「下ノ九」「下ノ十」欠）
後篇（上下）本学上二十五枚下二十二枚、計四十七枚
丁付：各丁裏ノド下方
口絵：挿絵の賛は歌舞伎役者の狂歌（尾上梅幸・市川登升・中村歌柳）
作者：山東京鶴、また山月淡人（後篇内題脇）・山月庵京鶴（後編挿絵賛）
画者：菱川清晴事菱川師保画（一部、門人師房筆）
序跋：山東京鶴（印澄／成）、前篇）、山月草庵のあるじ（後篇）、山月（同跋）
賛　：狂歌等。「三拍子そろひし君か月の眉雪のはだへに花のかほはせ　山東庵京山」（後篇上）、東都／半月（後篇下）、
　　其川（同）
版元：挿絵中に「寸松堂（天□／書林〈勢／烏丸三条上ル／二丁目」）（刊行年次不記載）とあるが、江戸浅草に「寸松
　　堂」（大森氏）はあるが京都・大坂に「寸松堂」はない。

【梗概】（前篇上之巻）ある年四月の初め、町人だが万事江戸っ子風を気取る侍姿の繁八と、同様ながら町人風の昌六の二人連れ（ともに偽江戸っ子）が、洛西御室山の八十八ヶ所を参詣しようと悪ふざけをしつつ、また失敗を重ねつつ京千本通を北にのぼり、下立売通へ出て安楽寺の天満宮と妙心寺に参詣した後、御室仁和寺に向かう。

（前篇下之巻）御室山に着いた二人は、一番阿波国霊山寺、二番極楽寺、三番金泉寺（未建立。印の木のみ）、四番黒谷寺、五番地蔵寺、六番安楽寺、七番十楽寺、八番熊谷寺、九番法輪寺、十番切幡寺（三十九番寺山まで阿波国）、十一番藤井寺、十二番焼山寺、十三番一の宮寺、十四番常楽寺、十五番国分寺、十六番井出寺、十七番井戸寺、十八番恩山寺、十九番立江寺、二十番鶴林寺、二十一番大竜寺、二十二番平等寺、二十三番薬王寺、二十四番東寺、二十五番津寺、二十六番西寺、二十七番神峰寺、二十八番大日寺、二十九番国分寺、三十番一の宮、

三十一番五台山、三十二番禅師峰寺、三十三番高福寺、三十四番種磨寺、三十五番清滝寺、三十六番清竜寺、三十七番五社（ここには土器投げあり）、三十八番蹉跎山、三十九番茶所（女性に限り宿泊を認める）と、これまた悪洒落・悪戯・喧嘩等を繰り返しつつ参詣し、一晩無理に泊めてもらうことになった茶所にて、昌六が止めるのも聞かず、繁八が和尚の留守中に空腹の余り飯櫃の蓋を取ろうとする（末尾に、右の茶所での飯櫃の滑稽、五十三番円明寺での洒落、近江屋での酒盛りの段等の、続く二篇目〈後篇〉を予告する）。

（後篇巻之上）茶所に至った繁八・昌六の両人は、麓の法住庵まで出かける茶所の僧に留守を頼まれるが、傍らにある飯櫃を見つけた繁八が空腹の余り、昌六の制止も聞かずに口にしてしまう。そうこうしているうちに出かけていた僧が帰ってきた。火の点った行灯に気づいた和尚が、行灯の場所がよく分かりましたなと言うと、その手に徳利があることに目がとまった昌六が、それは酒かと問うと、和尚はそちたちが泊まるので、麓にもどったついでに持参してきた油だと答える。昌六がその気遣いはありがたいが、ついでに酒も少し持参してくれたらもっとありがたいと言う。また繁八が茶漬けを一杯所望すると、麦飯だがと断りながらも用意してくれた。そのうち時刻も四つ時になって就寝、翌日は早朝から目覚めた。四十番歓自在寺、四十二番仏木寺（賛「三拍子そろひし君が月の眉雪のはだへに花のかほばせ　山東庵京山」）と回って、「四国栗毛の前篇がでやしてから七年このかたのはたらき」、四十七番八坂寺、四十八番西林寺、四十九番浄土寺と参拝。

（後篇巻之下）両人が四十九番浄土寺に行くと、仏前の提灯に祇園新地あふみや岩の印があるのを見つけて一悶着あった後、五十二番太山寺、五十三番円明寺、五十四番延命寺、五十五番三嶌別当、五十六番泰山寺、五十七番、五十八番、五十九番国分寺へと詣で、六十二番一の宮、六十三番吉祥寺、六十四番前神寺、六十五番三角寺、六十六番雲辺寺、六十七番、讃岐国六十八番と回った後、日が暮れて二人の行方は確認できなくなった。「山月謹で後へにしるす」跋。

備考：「御室八十八ヶ所」は、洛西・御室仁和寺背後西側にそびえる成就山中に文政十年（一八二七）、仁和寺二十九世門跡済仁法親王の命により、四国八十八ヶ所の各霊場から土砂を運び、霊場ミニ版がここに開設された（『京都大辞典』昭和五十九年、淡交社刊、仁和寺発行「御室八十八ヶ所」）。つまり本書は天保頃の刊行で、尾崎氏も原本へほぼ同様の推定を書き入れている。

②御影参（角書「滑稽／教訓」）中本

初編（上下）二冊　国文研（後印本。外題・角書「滑稽／道中」御影まいり）

二編（上下）二冊　架蔵

三編（下）　一冊　架蔵（上未見）

四編（上）　一冊　弘前市立図書館（下未見）

附録（上下）二冊　四国大（文政十三年の抜け参り資料集。外題・角書「滑稽／道中」御影まいり附録」）

外題：角書「伊勢／御影」道中膝栗毛（二～四編）

作者：内題左下に「摂府　暁鐘成門人　平安　山川澄成　戯作」。附録上の跋文にも同意の記載。附録下の口絵は暁鐘成撰の「年代記の残欠」。

画者：すべて菱川清春画。二編上末の春日担茶屋の図は暁鐘成模写。

賛：狂歌等。菱川清晴（初編下）、中村梅玉、人形師鹿のや（家）真萩（大坂心斎橋通順慶町ヨリ一丁北博労町西側）。越路雪成、「花はなをかすみも八重にひきはえてならの都の春ぞのどけき　暁鐘成」、連風、四端、「南都名産元興寺鬼味噌の精造売弘所　鹿之家真萩」、中村梅花（二編上）、永楽井好成（二編下）

刊記：ナシだが、「今年文政十三年弥生の半ばより、此おかげ参り流行いだし」（初編上）、「明和八年（一七七一）御影

参り流行の砌、立てたる道しるべありとぞ。既に六十年（天保二年）の星霜」（初編上）とあるから、文政末頃の刊行。

【梗概】（初編上）浪花の怠けもの抜七と久作の両人は、流行の御影参りとしゃれ込んで伊勢参宮に向かうが、抜七と堺筋の辻で待ち合わせるはずだった久作は、あまりの参詣人に紛れるがやっとのことで抜七と出合う。二人は足を速め、大今里を過ぎ深江村に到る。

（初編下）二人は深江村の群集を押し分け高井田村に到る。ここは摂津の国の国境で、これより東は河内国で御くりや村に続く。ここで二人は名物の蕎麦を食べた後、奈良の宿屋に泊まり三輪・長谷・阿呆越えにかかり六軒に出て山田に到る。

（二編上）奈良は昔都があっただけに風流な所だが、伊勢参宮人が街道狭しと押し合い状態だった。ここで二人は、正直屋正兵衛なる老人と道連れになり、尼が辻の茶屋を出て南都の出口町に到ると、春の日も生駒山の端にかかる時刻となったので、垂井町で宿を探すがどこも満員、正兵衛のつてで今御門町の講宿に、一畳ほどに三人辛うじて割り込むことができた。風呂と夕飯も済ませ、窮屈な形で横になり旅日記も書き終え、二人はもう一日滞留して明日は奈良見物と決め込み、老人とも別行動ということになった。ここに至ってそれぞれ自己紹介する。久作は嶋の内関町の本屋と言い、抜七は伊勢屋という左官で、元は大坂上町、変託して西の剣さき町、今は京都宮川町と言う。老人は西横堀の石や橋に住む石垣職人と言う。翌朝、朝飯の用意も調ってめいめい起きだし、正兵衛は伊勢参宮に向い、二人は猿沢の池から春日大社へとまだ薄暗い内から出かけた。途中暗闇で大きな鹿二頭に袖をくわえられ、狼と誤解して驚きつつ人家に駆け込む。角のある狼はいないと知って二人とも落ち着き、次いで名高き蟬の燈籠見物に出かけ、途中の水茶屋で名物の火打ち焼きを食べる。

（二編下）水茶屋を出た二人は、若草山の麓西方の名物の油煙墨や筆を売る店を過ぎ、二月堂の観音に参詣、そこ

にて、夕べ宿で転び作りかけの筆の毛や布糊が付いたままの頭髪を直していると、二月堂の僧に、二人は髪を切って献上と誤解されて急ぎ退散、大仏殿に向かう。東大寺に着くと、蕨餅を商う茶店に寄ってしたたかこれを喰い、ついでに道を尋ねて景清門に出る。下手な字の落書きを見て、「悪筆兵衛」と戯れて確かにここは景清門とふざけ、また大仏餅屋に入れば京のそれと混同するなど失態を重ねる。菊屋のあられ酒や古梅園の墨店も見たので、二人は色里の木辻にでも行くかと洒落るが、寄り道でまた同じ宿に泊まることになっても困ると、その前に煮売り屋でたらふく飲み食いし、妹背山に言う十三鐘や興福寺、西国九番札所のなんゑん堂、絹掛柳などを見て元興寺に着き、心斎橋筋の鹿の家が売る元興寺名物鬼味噌を話題にする。元興寺町から賑やかなはせ街道の往来筋に出て、酒も回ってきた二人はここにて勧められるままに、通りかかった施行駕籠につい乗ってしまう。

（三編下）抜七と久作の二人連れは、黒崎から出雲村を過ぎて長谷寺に到り、その長い廻廊を苦労して上りつめ本堂に詣でる。ここで久作が言うには、最前、三輪で聞いた話にこのあたりを過ぎると草鞋の価が高くなる。草鞋が品切れで買えない事態になっても困るから、安価な今のうちに多めに買い込み、道々利を取って売ろうということになった。捕らぬ狸の皮算用で、町外れの草鞋屋で二人は価九貫でやや古い草鞋を百足買い込み、それぞれが五十足ずつ背負って出発した。旅路は次第に山道となり、二人はその重さに大弱り。余りの重さに久作が、一つにしていっそ坊主持ちにしようと言い出し、いろいろもめた結果、最初は抜七が持つことになった。また途中の茶店で聞くに、少し前にも草鞋を売りつける者がいて、庄屋さんに松の木に括り付けられたと二人は聞いて顔を見合わせる。福地・山辺等を過ぎて大野で昼飯にする。この街道はすべて、奈良より伊勢の松坂へ通う往還で馬・駕籠も多いが、それでも昨今は不自由故、農家の牛に矢倉を置き、旅人を乗せると専らである。二人は話の種に名張まで二百のところを百六十に値切って牛に乗り、久作は一首「馬あひが牛に乗合だら〳〵と涎の様にいせへもふでる」と詠む。途中で腹痛の牛追いが雪隠に行っている間に二人は眠りこけ、牛は勝手に四・五丁ばか

りも歩を進めていたので二人は大いに驚く。騒ぎに気づいたその家の主が言うには、この牛は今日初めて他人に貸したがその男が雪隠に行った間に、自分の家に帰ってきたらしいとのこと。街道筋に戻るのは遠回りなので、今晩はこの家に泊めてもらい、明日わかりにくいが近道をこの牛に乗って行くことにした。翌朝二人は牛と離れた例の雪隠男が向かいに来て、楽々に二本松まで辿り着いた。そこで二人は牛追いと別れ、今日は松坂泊まりにして明日大神宮参詣と予定し、大野木・谷戸・田尻・八田を過ぎ宮古村にかかると、旅人の一群が騒いでいる。何事かと思えば、手負いの大猪一匹が暴れていたのだった。避けた拍子に転んで顔を擦り剝いた二人は膏薬を買い求めて張り、六軒に赴く。かくして中村川も越え津屋城も過ぎ、六軒茶屋に出る。ここは京からの本街道と大坂からの阿呆越えの合流点で、二人もここでしばらく休み松坂に向かった。【奥付】「おかげの四へんを、なんでこのやうにせいて、よどふしにやるのじやな」「こんどの四へんめは、抜七と久作がいせへまひる所で、一ばんのせうねばじや」「それでせけんにも、ゑらふまつているので、一日でもはやふ本だしをせふといふつもりじや」（男二人の板摺の図…本稿への図版掲載省略）

（四編上）浪花のなまけ者の抜七と忠屋の久作（相模の小田原者）の両人は三、四日前に大坂からこの松阪にやってきたが、抜七は人混みに紛れて久作を見失い、迷子を探すように必死で探し、ようやく風呂に入っていた久作を見つけ、安堵して就寝するまでを描く。

（附録上下）「お影参り」の諸資料集とも呼ぶべきもの。

③変宅論（角書「滑稽／新書」。上下二巻　中本　二冊

外題：滑稽変宅論（尾題「変宅論」）　尾崎久弥

作者：山月庵主人　内題左下に「洛東‖　山月庵主人戯作」

画者：菱川清春・清春門人月川輝重（十二歳）。上巻口絵に山月庵像と清春像があるが、本稿への図版掲載省略

序　：「滑稽作者　山月庵主人（印山月）」序

賛　：狂歌等。尾上梅好、江戸／為永青陽、山月庵門人鶴声、鳥居清安、市川登舛

刊記：天保四年癸巳孟春発兌／大坂　河内屋長兵衛／京都　金屋吉兵衛（ただし、自序に「変宅論と題し書肆弘知堂に投ず」とあるので弘知堂こと金屋吉兵衛版）

【梗概】（上巻）京御室双岡に住む、万事江戸風を気取る半分粋（分粋とも）という者、もっと繁華な所で暮らそうと下河原辺に一家を借りようとして巻き起こす珍騒動を描く。半分粋はまず太郎介という百姓を同道して下河原辺にでかけ、一軒の空き家を見つけたので家主を訪ねて家賃を問うが、鋪の意味の取り違えや受け人・引取のことで一騒動となる。家主宅を後にして半分粋はいよいよここに宿替えをすることになり、借家掃除に金八と熊太郎を雇う。また金八には竈を、熊太郎には台所の流しを買いに行かせ、その間に自らは祇園社に参詣する。両人が壁も直した後、金の使いようと残金のことで大声で喧嘩していると半分粋がもどり、そこへ二十歳くらいの女性が半分粋を訪ねてきて、宿替えが自分に内密だったことや懐妊のことで口舌となる。その途中で女性が産気づく。そこへやってきた家主は様子に大変驚き、まず医者の玄竹を呼ぶ。玄竹は一人で産婦と目が回っている金八の二人を介抱し、やがて無事お産も済み金八も気がついたので、母子は双岡の実家に送り預け、人々も我が家へと帰った。

（下巻）半分粋が所持する書画をこの度の宿替え先に運ぶことになっていた呑兵衛なる百姓は、書画だけに皺にならないよう小便太桶の中に入れておいたところ、これが原因で珍騒動が起き、また妙な宿替え祝いが行われる。呑兵衛はその太桶を宿替え先に運ぶが、案内を請うても一切返答がない。腹いせに傍の子供の頭を蹴ったところこれが実は石の地蔵だった一幕があり、何もしらぬ半分粋はそこに用足しをしてしまう。いちいち洗おうとする

半分粋を来合わせた金八が見て、濡れた色が病気の色をしていると言う。半分粋は濡れた書画を一つひとつ確認して洗いながら駄洒落を言いつつ清め、翌朝一人になった半分粋は、先宅より箪笥が届くのを待つ。運び役の百姓二人は、箪笥の上に天蓋を潰すまいと仰向けに乗せ、その中に半分粋が買っておいたスルメを一把入れて宿替え先に運ぶが、途中寺町三条辺で天蓋ごとスルメを鳶に掠われる。鳶は三条縄手の辻で天蓋を落とし、それが通りかかった六十歳ほどの田舎侍の頭に落ちてスッポリはまる。しかし侍はそれでも無言で進み歩むので、百姓達が天蓋を取り返そうとするを侍は喧嘩をしかけられたと勘違いし、これまた一騒動となる。その後へ双岡の久作なる百姓が肴篭を持って家見舞いに来る。半分粋が礼を言って篭を受け取ると、肴ではなくてひきがえるが飛び出た。久作が裏町の八右衛門と相談してひきがえる、それもなるべく大きな物にしたと説明すると、半分粋は呆れ驚きながらも心尽くしへの礼を言う。そこへまた別の百姓が杉の木一本を持参して家見舞いに来た。訳を聞くと、天狗な人への見舞いだからという庄屋の意見に従ったと言う。そこへまた茗荷の子を一篭持った百姓が来て、先生は百の口が六七文足らぬからこれを持参したと言うので喧嘩になるが、久足が間に入って収まる。

備考：半分粋の発言に「京伝先生」（上）、「大坂にいったとき、上町の清春さんに」（下）の文言がある。

④滑稽鬼霊論　一巻　中本　一冊

外題：鬼霊論　尾崎久弥、大阪大（原題簽に「京　弘智堂梓行」とあるので金屋版）

作者：山月庵主人

画者：菱川清春、師種

序跋：「天保癸巳（四年）節分　洛東の　山月庵」序、「洛東の京柳」跋

賛　：狂歌等。貞也翁

刊記：天保五年／甲午孟春／大坂　河内屋長兵衛／京　山城屋佐兵衛／同　金屋吉兵衛

【内容】「鬼」を様々な「き（気等）」になぞらえ、「平気物語」等の駄洒落を混ぜた見立て本。律鬼（律儀）・悋鬼（悋気）・鬼がつまる（気がつまる）・鬼がね（気兼ね）等二十条からなる。

備考：「三馬子」、「京伝先生」（二ヶ所）の文言がある。

次いで洒落本の諸作を取り上げる。

⑤大各（洒落本大成第二十八巻、昭和六十二年、中央公論社刊）所収。

半紙本　一冊

外題：傾城情史大各（見返題・角書「傾城／情史」大各）

作者：見返に「洛東　関亭京鶴述」とある。

序跋：「天保辛卯（二年）秋八月　洛東　関亭京鶴」自序、「浮世絵師　菱川清春記・印青／陽」跋。

刊記：天保三年壬辰五月成刻／京都　田中屋専助／大坂　伏見屋嘉兵衛／名古屋　永楽屋東四郎／江戸　和泉屋庄次郎（ただし、見返に「京都書林　畤転堂発行」とあるので田中屋専助版）。

【内容】宝暦・明和の頃に一しきり流行した経書の童蒙解の類で、「大学」の解をもじって「大各」としたもの。

⑥意気客初心（洒落本大成第二十九巻、昭和六十三年、中央公論社刊）所収。

中本（上下）　二冊（見返に山月庵主人の座像…本稿への図版掲載省略）。

作者：内題左下に「山月庵主人著」「校」。

序跋：「丙申（天保七年）開歳　呉鶴巣主人識／碧叢園主人書」序、
「天保乙未（六年）夏五月　山月庵主人題／門人半月謹書」序、
「大和の欲若」跋。
刊記：天保七季／申春発版　京都／書林　山城屋佐兵衛／吉田屋新兵衛。
【内容】書名は「易学小荃」のもじりで、天明期までの易占書をもじった作を復活させたものだが、算木や銭占いの代わりに、煙管・短冊・物指等の日常品を用いたところが新味であろう。
備考：愚仏先生、狂言作者南北先生、真顔先生、吾師山東先生、京伝先生（以上、上巻）

最後に読本を取り上げる。

⑦嵐峡（やま）（「山」）花月奇譚（つきはなものがたり）（版形不明前後編十冊。一冊目見返に「京　鶴山逸人瀬川恒成作／同　青陽齋　菱川清春画／京　隔梅散人　関亭京鶴校／宝文堂・印摂陽書房（秋田屋市五郎）」。各柱下方にも宝文堂蔵とある。
作者：内題左下に「平安　瀬川恒成著」。中村幸彦蔵[2]
画者：菱川清春、菱川師種。
序等：前編「（文中に「題妹脊山院本行於世久矣、今春我友鶴山子営業之暇、戯翻案之、著花月奇譚若干巻、乞余于校正、余有小説癖、則不顧不才、加校之些云々）天保甲午（五年）初春　山月庵京鶴・印さんけつ京鶴誌」序、後編「山月庵　京鶴」序。後編一冊目奥に「天保四年二月補刻／大坂書林　秋田屋市五郎」とあり）。
刊記：「天保五年初春発兌／江戸　丁子屋平兵衛／中村屋幸蔵／尾州　玉野屋新右ヱ門／京都　近江屋治助／伏見屋半三郎／大坂　秋田屋市五　郎」。

【内容】前編序にいうように、世上に行われている、藤原鎌足が蘇我入鹿を討伐する物語を骨子とする浄瑠璃院本『妹脊山（婦女庭訓）』を翻案した作。

⑧屏風怨霊四谷怪談（大本五冊）

外題：角書「屏風／怨霊」四谷怪談（見返題も同じ）。

作者・画者・刊記：見返に「山月庵主人　作／菱川清春　画／天保六年　浪華　宝文堂梓行」。

作者については、内題左下には「平安　山月庵主人　戯編」とある。学習院大、中村幸彦蔵[3]。

序跋：「（文中に「平安京鶴文史、著四谷怪談五巻、繡像余、取観之菱川清春所描」云々）天保甲午（五年）春三月上浣（下略）三代目　尾上梅幸」序、「（文中に「吾友山京鶴子、応書肆宝文堂之需、翻案院本四谷怪談、更作一稗史」云々）天保甲午（五年）夏四月　李塘山人撰於鶯舌齋之南牕」跋。

刊記：「作者　皇都　山月庵主人／浄書　浪華　北村好平／校合　東都　尾上梅幸／画工　皇都　菱川清春／彫刻　皇都　樋口与兵衛」（五冊目奥）。

【内容】跋（後序）にいうように、院本（正しくは歌舞伎）『四谷怪談』を翻案した作。

備考：巻五の尾題前に中村本「大坂　秋田屋市五郎」とあり（学習院本なし）。

⑨小夜衣真砂物語（版形不明前後編十冊。前後編とも天保九年十一月序刊で、後篇奥に大阪・群玉堂河内屋岡田茂兵衛とある）。

作者：内題左下に「平安　山月庵主人　戯編」。学習院大、中村幸彦蔵[4]

序　：前編「（文中に「吾友山月庵主人」とあり）天保九戌冬十一月／鶴山樵夫題・印和／忠貞／卿」自序、後編「天

保戊戌（九年）冬」序。

題詩：山月淡人

【内容】盗賊石川五右衛門を扱った作としては白浪物だが、謀叛の素志があった西川剛右衛門金忠を主人公とする意味では一代記である。時代は遡って平清盛を主要人物の一人として活躍させるが、もちろん豊臣秀吉に擬したのであり、勧善懲悪の趣旨のもとに適宜怪奇的色彩を施し、金忠の最期は釜茹での刑とする（横山邦治氏『読本の研究』昭和四十九年、風間書房刊）。

⑩神功皇后三韓図会（大本五冊、天保十三年正月刊）

外題：角書「神功／皇后」（見返題も同じ）三韓退治図会」。一冊目見返に

作者：「山月庵主人著／葛飾戴斗画図」、内題左下に「平安　山月庵主人　編述」。国文研、弘前市立図書、中村幸彦蔵[5]。

序　：「天保辛丑（十二年）冬」序（題辞）。

刊記：「天保十三年壬寅正月／東都書林　丁子屋平兵衛／皇都書林　丸屋善兵衛／河内屋藤四郎／浪華書林　河内屋源七郎／河内屋茂兵衛」。大坂の「製本所　前川源七郎」の名も見えることから、おそらく上方版であろう（『読本の研究』）。

【内容】上代の伝説的な皇后・神功皇后が信託を得て、朝鮮古代の高麗・百済・新羅の三国を伐ったという逸話を脚色した作。

四、まとめ―山東京鶴小伝―

代表作を一通り概観し終えたので、京鶴の小伝を改めてまとめ直してみたい。最初に『京摂戯作者考』以外の、当時の戯作者伝書を眺めておきたい。まず石塚豊芥子の『戯作者撰集』、曲亭馬琴の『物の本江戸作者部類』、岩本活東子の『戯作者小伝』には見当たらず、同じ木村黙老の『戯作者考補遺』にも記載がない。残念ながら生没年は未詳で、享年もわからない。滑稽本・洒落本・読本を述作刊行した、戯作者としての活動時期はほぼ天保年間（一八三〇～四三）と見なしてよかろう。一つ気になるのはその戯作の師である。本人は諸所（③④⑥）で山東京伝（文化十三年〈一八一六〉、五十六没）門下のように記しているが、戯作名が似てはいても天保期では時期が合わない。また京伝弟の山東京山の名も出ている（①）ことからすると、中野三敏氏は⑥の洒落本大成改題で京伝門弟と推定しておられるが、あるいは京伝・京山兄弟を崇拝していたに過ぎないかもしれない。これとて津田真弓氏の労作『山東京山年譜考』（平成十六年、ぺりかん社刊）に京鶴の名は見えない。京都洛東の人間（③④⑤）・京鶴と直接結びつけるには、今少し根拠も必要であろうが、京伝より現実感があるのが、『京摂戯作者考』が伝える大坂戯作者・暁鐘成師事説である。鐘成なら②でその門人と明記もしている。ただ長友千代治氏の労作「暁鐘成」（『近世／上方 作家・書肆の研究』平成六年、東京堂出版刊）にも京鶴の名はほとんど出てこず、ただ古書目録に『四国栗毛』稿本が存在する報告がなされているのみである。

その他、判明したことのみをまとめておくと、山東京鶴は、別号を山川（姓か）澄成（①②）、瀬川恒成（⑦）、山月庵（①③④⑥⑧⑨⑩）、山月淡人（①⑨）、関亭京鶴（⑤⑦）、鶴山（⑦⑨）、山京鶴（⑧）、隔梅散人（⑦）などと称し、和忠・貞卿（本名や字か。⑨）とも号した。活動期はすでに述べたように天保期が中心（①～⑩）で、滑稽本の外に洒落本・読本も執筆しているが、その中心は自ら「滑稽作者」と記す（③）滑稽本で、一九の模倣をしつつも地元地理を活用して新

鮮味を出そうとしている。新し味が命の洒落本ではとうに全盛期を過ぎている形式の踏襲でしかなく、演劇作翻案が目に付く読本の他、全体として歌舞伎役者名と狂歌が散見されるなどその演劇趣味と狂歌趣味が看取され、江戸のみならず次いで大坂にも追随する姿勢が伺われる。また、大坂で知り合ったと思われる浮世絵師の菱川清春（③）と組んで著作を著すことが多かった（⑥⑨⑩を除く七作）。

注

（1）森銑三・野間光辰・朝倉治彦の三氏監修『続燕石十種』第一巻（昭和五十五年、中央公論社刊）。
（2）原本未見。国文学研究資料館所蔵マイクロフィルムを利用した。
（3）原本未見。国文学研究資料館所蔵マイクロフィルムを利用した。
（4）原本未見。国文学研究資料館所蔵マイクロフィルムを利用した。
（5）原本未見。国文学研究資料館所蔵マイクロフィルムを利用した。